

伊丹福音ルーテル教会 聖霊降臨後第二十二主日礼拝のしおり

2021年10月24日

前奏

招きのことば：詩編 126 編 3-6 節

主よ、私たちのために 大きな業を成し遂げてください。わたしたちは喜び祝うでしょう。
主よ、ネゲブに川の流れを導くかのように わたしたちの捕われ人を連れ帰ってください。
涙と共に種を蒔く人は喜びの歌と共に刈り入れる。
種の袋を背負い、泣きながら出て行った人は束ねた穂を背負い
喜びの歌をうたいながら帰ってくる。

罪の悔い改めと赦しのことば

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。
私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、かぎりなきいのちを信ず。 アーメン。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、あなたの御言葉をいただいて一週間を始めます。あなたは今朝も御言葉によって私たちに信仰を与え、強めてくださいます。罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただきます。ここから私たちの新しい一週の歩みが始まります。

あなたは御言葉を聞く私たちをここから生活の場に送り出してくださいますが、あなたはまた生活の現場にも来てくださって私たちを導き支えてくださいます。日常生活の中でこそ、あなたに導きを受け、あらゆる災いから守られ、更に隣人の力になれるように鍛えていただきます。新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐために、なお緊張感を保っていかねばなりません。その中でも御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして安心して生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：ヘブル人への手紙 7章 23-28節

また、レビの系統の祭司たちの場合には、死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。しかし、イエスは永遠に生きているので、変わることはない祭司職を持っておられるのです。それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

福音書朗読：マルコによる福音書 10章 46-52節

一行はエリコの町に着いた。イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。ナザレのイエスだと聞くと、叫んで、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と言い始めた。多くの人々が叱りつけて黙らせようとしたが、彼はますます、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けた。イエスは立ち止まって、「あの男を呼んで来なさい」と言われた。人々は盲人を呼んで言った。「安心しなさい。立ちなさい。お呼びだ。」盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。イエスは、「何をしてほしいのか」と言われた。盲人は、「先生、目が見えるようになりたいのです」と言った。そこで、イエスは言われた。「行

きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。

讃美歌 242 番

1. 「悩む者よ、われに来よ」と 恵みの主は招きたもう
重荷負いて あえぐ友よ 主のみもとに来たり憩え
2. 「悩む者よ、われに来よ」と 光りの主は招きたもう
暗き道に 迷う友よ、主のみもとに いそぎ帰れ
3. 「悩む者よ、われに来よ」と 救いの主は招きたもう
罪を悔いて嘆く友よ 主の赦しの 御声聞けや **アーメン**

説教：「わたしを憐れんでください」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

ひとりの盲人の方がイエス様に叫んでいます。声が聞こえてきそうです。誰か黙らせようとしても、また叱っても、この方はますます必死になって叫び続けています。「ダビデの子よ！わたしを憐れんでください！」何度も繰り返しました。

その盲人の方はバルティマイという名前だったことも記されています。バルティマイが叫び始めたのはナザレのイエス様が通りかかっていると小耳にはさんだからでした。ナザレのイエス様、というお名前を聞いたのですが、バルティマイはそのイエス様のことを「ダビデの子」と言い換えて叫んでいます。ダビデの子はイスラエルの国を立て直す王と考えられていました。当時強大な力を誇ったローマ帝国の支配下から自由になって自分たちの国を再建してくれる、昔のダビデのような立派な王様が出てくるのを待っていました。このあとイエス様がエルサレムに入って行かれた時、人々は口々にイエス様にダビデの国を立て直してくれる方だと言ってほめたたえました。イエス様のお弟子たちも、イエス様が王位につかれるとき右と左に座らせてほしい、とお願いしました。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください！」と叫び続けたバルティマイにとっても、イエス様はダビデの子だったのです。

しかし、バルティマイはイエス様についてほかの人々とは違うとらえ方をしていました。それはイエス様がその方を呼び寄せて「わたしに何をしてほしいのか」と聞かれたときにわかりました。イエス様は同じ質問を、エルサレムへの途上で、イエス様のところにひそかにお願いに来た弟子のヤコブとヨハネにもしていましたね。そのとき二人は、「あなたが栄光をお受けになるとき私たちをあなたの右と左の座に座らせてください」と願いました。野心です。今まで従ってきたのはその野心が叶うためでした。夢をかなえてください、という願いでした。

バルティマイはどうでしょうか。イエス様が自分を認めてみもとに呼んでくださったのを知らされて、すぐに全財産だった上着を投げ捨てて、喜び踊ってイエス様のところに来ていました。肌身離さず持っていた上着がバルティマイの安全の保証でした。上着を投げ捨てたとき、バルティマイはイエス様に全人生をかけていたのです。イエス様だけに望みを寄せています。わたしを憐れんでください、という叫びは、自分のあわれな姿を救ってくださるのはこのダビデの子イエス様だけだ、今がもしかしたら最後の機会かもしれない、さえぎられても叱られてもかまわず、声がかれても魂の叫びを絞り出していたのです。イエス様が近くに呼んでくださって「わたしに何をしてほしいのか」と聞いてくださったとき、バルティマイは子どものような気持ちでイエス様を信じ切って、先生、目が見えるようになりたいのです、と答えました。イエス様はあなたの信仰があなたを救った、と言ってくださいました。そしてバルティマイの目が見えるようになったのです。

イエス様と一行はエルサレムに向かってこれまで長い旅をしてきました。その旅の最後にバルティマイに出会っています。エリコの町でした。イエス様と一行は北の町ピリポ・カイザリアから旅を始め、ガリラヤ地方を通過してヨルダン川沿いを南下して、もうすぐ山の上の都、エルサレムに近づきました。エリコはエルサレムの登山口のようなまち、交通の要所でした。これまで150kmくらいの旅をしました。あと30kmたらずというところです。

エリコの町で最後に、幼子のような信仰の人、バルティマイに出会いました。ダビデの子であるイエス様に子どものような信仰をもって「わたしを憐れんでください」と叫んだ信仰です。すべての持ち物を投げ捨ててもイエス様に信頼した信仰です。律法の知識は少なかつたかもしれませんが。しかし自分のすべてを変えてほしい、とイエス様の憐みだけに期待した信仰です。

この旅はピリポ・カイザリアという北の町から始まりました。人々はイエス様を預言者程度にしか思っていませんでしたが、その町で弟子たちはイエス様をメシアと信じていたことがわかったからです。

たしかに、旅の前にはイエス様のところに人々は病を治してほしい、悪霊を追い出してほしい、と集まってきていました。友人たちは病気の友達をベッドごと担いで連れてきたこともありました。歩いているときに人ごみのなかで信仰をもってイエス様の衣のすそに触った女性もいました。しかし人々がイエス様のところに憐れみを求めてきていたのは、必ずしもイエス様に対して救い主としての期待をもっていなかったことがわかります。イエス様はピリポ・カイザリヤまで弟子たちを連れていき、そこで人々について聞かれました。人々は自分を誰と言っているか。人々はイエス様のことをバプテスマのヨハネの再来、エリヤのように力ある神の恵みを伝える預言者の再来、と言っていると弟子たちは答えたのでした。

イエス様は弟子たちに聞きました。ではあなたがたはわたしをだれというか。ペテロが代表で答えました。あなたはメシアです。そうです、イエス様はメシア、救い主、イスラエルと世界を救うために来られた方です。弟子たちはそのように信じていました。

そこからエルサレムへの旅が始まりました。旅の途上でイエス様は三回、弟子たちにご自分のエルサレムでの苦しみと死、そして復活を予告されました。そして、弟子たちの信仰告白の内容を、イエス様は修正してくださいました。弟子たちが告白した、イエス様が救い主である、という信仰告白は、イスラエルをローマから救い出す政治的なメシアではないこと、救いはそのような一時的な救いではなく永遠の救いであること、神の律法を守る民の民族的な救いではなく、すべての人に福音をもって救う全人類の救いであること、人の上に権力と支配をふるう立場を与える救いではなく、罪と死と悪魔の力からの解放と主イエス様によるご支配に従う喜びの救いであることを教えられました。弟子たちの告白したイエス様が救い主である、ということの内容が修正されていったのです。

エルサレムへの旅の途上で、律法学者が自分たちは律法を守っている、あなたはどうか、と挑戦しました。まじめなお金持ちの人が来て、イエス様に私はちいさいときからすべきことをしてきましたから神の国に入れますよね、と確認をしにきました。イエス様は彼に財産のすべてと神の戒めのどちらが大切かと答えました。彼は神様と富に兼ね仕えていたのです。弟子たちは、自分たちが全財産を捨てて神に従ってきたと胸をはりましたが、そんな自分の実績を誇る弟子たちにイエス様は、後のものが先になるといわれました。律法の知識も、弟子たちの熱心も、金持ちの青年の努力や意志も頼りになりません。バルティマイはこれらの点では後のものでしたが先になりました。イエス様に子どものように自分のすべてをもって信頼したからです。

さて、バルティマイがイエス様に目が見えるようにしていただいたとき、行きなさい、と言われました。これから自由にしていいますよ、目が見える人として歩めるのですよ、よかったですね、と言われたのです。しかし、バルティマイは自分からなおエルサレムにお進みになるイエス様に従っていったと記されています。イエス様に従うために私の目が見えるようにしていただいた、と自分で確信していたのです。イエス様を信じて歩む喜びは、イエス様に従って歩むということですよ。

エルサレムでイエス様はご自分がダビデの子であるという意味をお教えになりました。そこにもバルティマイはいたでしょう。イエス様は、ダビデがイエス様のことを主と呼んでいるので、実はダビデの子ではなくダビデの主である、と言われました。

バルティマイは、イエス様が十字架にかかって私たちの罪の赦しを完成してくださり、そしてよみがえって神の子として生きるいのちを私たちに与えてくださった一部始終にも立ち会ったことでしょう。バルティマイはエルサレムで、その目でダビデの子、いやダビデの主であるイエス様が罪の赦しと新しいいのちを与えるメシアであることを見ました。

あなたはイエス様を誰と言われますか。信じた時のことを思い起こして下さるといいと思います。ご自分にとってイエス様は救い主です、という告白をなさっていますね。イエス様に最初に祈ったこと、救い主のイエス様、わたしをあわれんでください。自分は神様からはなれ、愛のない者、自分で自分を変えることができないみじめなものです。神様のみまえには罪びとで、神様の裁きを受けて当然のものです。けれども、イエス様、あなたは救い主です。どうかわたしを憐れんでください。私は上着を投げ捨ててみ前にまいります。私のかわりにエルサレムで十字架にかかって死んでくださいました。そして、三日目によみがえってくださいました。神様のみまえで私の罪を赦してください、さらに神様の子どもとして新しいのちを生きることができるようになってくださいました。イエス様、感謝をいたします。このうえは、あなたからいただいた罪と死と悪魔の力からの自由をもって、それを自分の幸せの追求のために用いるのではなく、神様の召されたところで、神様が私を置いてくださっているところで、神様のみどころを行って歩むように、私は自らあなたに従ってまいります、と祈るのです。

すべてのクリスチャンは、神様に献身しています。自分の持ち物や、地位や、仕事や、家庭や自分のすべては神様のものです。神様におゆだねします。それは握りしめてきたものを手放すことです。自分のものであった、自分が積み上げてきたものだ、と思ひ込み信頼してきたあなたの握りしめる手から自由にされるのです。主日礼拝はそのように神様におゆだねするときです。そして、改めて、今遣わされていく今週の歩みに、神様から与えていただいた持ち物、地位、仕事、家庭、自分のすべての環境を神様の子どもとして確かにあずかり、そこで神様が託してくださった使命をしっかりと心を込めて果たしていく一週間を始めます。

救い主であるイエス様は私の罪を赦し、神様との交わりに新しく生かしてくださいます。神様に愛されて、神様と隣人に仕えていく幸せな道が開かれます。自分の思いだけで歩んでいた私たちが神の御心を求め神の御心に従う者へ、仕えられることを求めていた私たちが人に仕える者へ変えられて、幸せを人々と共有する生きがいと喜びの一週間を迎えます。今日も、主イエス様、わたしを憐れんでください、と魂の底から叫びつつ、主イエス様の赦しといのちをいただいて歩んでまいりましょう。

そこで、イエスは言われた。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」盲人は、すぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。マルコ 10:52

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン

讃美歌 333 番 献金 献金感謝の祈り

1. 主よ、我をば とらえたまえ、さらば我が霊(たま)は 解き放たれん
我がやいばを くだきたまえ、さらばわが仇(あだ) 打ち勝つを得(え)ん

2. 我が心は さだかならず、吹く風のごとく 絶えずかわる

主よ、御手もて ひかせたまえ、さらば直き道 踏みゆくを得(え)ん

3. 我が力は 弱く乏(とも)し、暗きにさまよい 道に悩む

あまつ風を 送りましたまえ、さらば愛の火は 内にぞ燃えん

4. 我がすべては 主のものなり、主は我が喜び、また幸(さち)なり

主よ、御霊(みたま)を 満たしたまえ、さらば永遠(とこしえ)の 安きを受けん アーメン

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあげさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。

われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。

われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。

国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讃美歌 543 番

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、あぁみ栄えよ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。 **アーメン**

後奏